

○アメリカネナシカズラの侵入年代について (浅井 康宏) Yasuhiro ASAI:
When was *Cuscuta pentagona* Engelmann introduced to Japan?

周知のようにアメリカネナシカズラが存在が、我国で明らかになったのは昭和50年のこと (植研 50: 238, 1975) で、比較的新しい帰化植物に属する。そして恐らく、これと相前後して各地に広く帰化状態を示すに至ったもの (植研 60: 223, 1985) と思われていた。しかしながら筆者は、第二次大戦直後の我国の食糧事情緩和を目的としたアメリカ合衆国からの輸入穀物に随伴する所謂夾雑種子由来の帰化植物 (科学朝日 30(6): 103, 1970) の一員として、オオブタクサ、アレチウリ、マメアサガオ、オキナアサガオ、ツルヤブジラミ、アメリカキンゴジカ、ツノミナズナ、コンナガワハギなどと共に、既に本種も侵入していたのではないかと考えていた。

ところで頃日、筆者は佐藤茂樹氏が神戸の六甲山麓に位置する西の宮市内の北山公園に近い路傍で、マメダオンを採集、観察された記録 (採と飼 25(5): 32, 1963) を披見する機会を得た。同氏の報文によると、昭和36年8月5日に同所でマメダオンがヤハズソウに寄生、群生しているのを見出した由である。そして“宿主が枯死したため、これが近くのヨモギやカミエビにからみつき、鮮やかな黄色にだいたい色を加えた細い針金状の茎が、草むらの上にあたかもネットでもかけたかのように被っていた”と述べている。なお本稿にはヨモギに寄生した全形、花序や着果の状態、個々の花や果実のスケッチなどが添えられてある。この報文は本種自体の記録と言うよりも、これに生じた虫嬰に関する問題を扱ったものではあるが、果実や花の形状がかなり明瞭に図示されていて参考になる。

ところで筆者は上述の生育環境や宿主の状態、さらに2本の柱頭を伴った果実の形状、花冠とくに尖頭を呈する反転した裂片の形、就中裂片の間から明瞭に突出している雄蕊の状態などから、スケッチであるため多少の疑問は残るが、これを一応アメリカネナシカズラそのものではないか、と考定するものである。したがって、これが正鵠を得たものならば、従来の筆者の推測のようにアメリカネナシカズラは、既に昭和30年代あるいはそれ以前に、極めて局所的なものとはいえ我国へ侵入していたことになろう。ことによると更に古い時代から、既知の近似種と誤認、混同され、存在していた可能性がある。

このようなことから第二次大戦後(昭和21年～30年代)に各地で採集され、マメダオン *Cuscuta australis* R. Brown あるいはハメネナシカズラ *C. chinensis* Lamarck と同定されている標本をぜひ再検し、本種の侵入年代をより明瞭にして下さるよう各地の関係者各位にお願いしたい。

終りに筆者が初めて本種の存在を報告後、さらにその侵入時期について詳しい調査を切望され、多くの示唆を与えられた故久内清孝、原寛先生ならびに種々御援助下さっている小山鐵夫博士に対し、衷心より感謝の意を表する次第である。

The author has proved that North American dodder, *Cuscuta pentagona* Engelm. was first introduced to Japan in 1975. Since then, this weed has been extending its range in Japan from Hokkaido to the Ryukyus becoming a noxious weed in waste places and sandy coastland of all over Japan. However, it is quite possible that this species had already entered into Japan immediately after the World War II, some time around 1945, and had been naturalized locally.

Assumingly, it had been misidentified as *Cuscuta australis* R. Br. or *C. chinensis* Lam. It is most likely that the seeds of *Cuscuta pentagona* were brought into Japan mixed in various grains (e.g. soybean, wheat, corn, etc.) from the United States, since a number of naturalized plants had apparently reached Japan in this same manner. The examples are: *Ambrosia trifida* L., *Sicyos angulatus* L., *Ipomoea lacunosa* L., *Jacquemontia tamnifolia* (L.) Griseb., *Torilis nodosa* (L.) Gaertn., *Sida spinosa* L., *Chorispora tenella* (Pall.) DC. and *Melilotus indica* (L.) All. (東京歯科大学)

□Grierson, A. J. C. & D. G. Long: **Flora of Bhutan including a record of plants from Sikkim**, vol. 1, part 3. 368pp.+17figs. 1987. Royal Botanic Garden, Edinburgh, 14. Royal Botanic Garden, Edinburgh が英国に保存されている標本と 4 回に亘る現地調査に基づいて発刊するシリーズの 3 冊目であり、ユキノシタ科・バラ科・マメ科・トウダイグサ科など 21 科が収められている。属と種の検索表・異名・原地名・記載・Bhutan と Sikkim での分布・生育環境・花期が記されている。検索表がすべての種までは達しない属もあるが、記載が詳しいのでどういう植物かは理解できる。1992 年には完結する予定であり、その後、図や写真による “Field guide of plants of Bhutan” の計画もあるとのことで、今後の出版が期待される。なお、vol. 1 の part 1 は 1983 年に、part 2 は 1984 年に出版されており、vol. 2 の part 1 は 1988 年に出版の予定である。(三木栄二)

□応建新ほか：中国药用真菌图鉴 579pp. 1987. 科学出版社, 北京. 113 元. 何らかの薬用価値の認められた、変形菌から子囊菌、担子菌、不完全菌に至る 272 種の原色図鑑。その多彩な顔ぶれにさすが漢方薬の国と感心したのと、あまりに美事な図なのでここに取り上げた。B 5 版の見開き左頁に大きな彩色図を、右頁に学名、漢名、別名、形態、生態習性、産地、薬用価値を簡単に記す。巻末に孢子やシスチジア等の線画をまとめて載せるほか、薬用価値別分類表、漢名と学名の索引、参考文献等を付す。(三浦宏一郎)